

〔コメント〕
東南アジアの都市・村落研究に
おける歴史地理学の課題
——野間晴雄報告によせて——

山下 清海

I. はじめに

今回、野間報告のコメントを行うことになった筆者は、これまで主として東南アジアの華人社会の地理学的研究に従事してきた。まず最初に、シンガポールとマレーシアのチャイナタウンや華人方言集団のすみわけの研究から、東南アジアに関する研究を始めたため、東南アジアの歴史についての筆者の主たる関心は、16世紀に始まるヨーロッパ勢力の植民地化以降にあった¹⁾。ちなみに、マラッカ王国がポルトガルの植民地になったのは1511年である。また、フランシス・ライトがベナン島に上陸し、イギリス東インド会社のベナン島領有を宣言したのは1786年であり、スタンフォード・ラッフルズによるシンガポールの開港は1819年のことである。

これに対して、野間報告は前近代の東南アジアという非常に広範な時代を考察している。また、野間報告の研究対象地域も、東南アジア全域から那覇・首里にまで及ぶ。時間的にも空間的にも、きわめてスケールの大きな「東南アジア歴史都市論事始」に対するコメンテータの任は、筆者にとってあまりにも重すぎると言わざるを得ない。

本稿では、まず、野間報告の内容に対するコメントをおこなったあと、東南アジアの都市・村落の歴史的研究において、歴史地理学が果たすべき課題について考えてみたい。

II. 野間報告に対する若干のコメント

野間報告の重要な点は、「背域」という概念を用いて、前近代の東南アジアの都市とともに、その後背地である村落域をあわせてとらえようとしたことではないだろうか。おうおうにして、多くの研究においては、華やかな建造物の遺跡群をもつアンコールやバガンのような都市のフィジカルな面に大きな関心が払われがちである。しかし、都市の多数の住民が都市プランの中でどの地区に住み、そこでどのような生活をしていたのか、また

多数の人口を擁する都市を支える食糧や必要な物資が、都市周辺のどの範囲の地域(都市の後背地^{ヒンダールランド})から調達されていたのかを明らかにする必要がある。野間報告の研究動機の背景には、このような問題意識が存在するものと思われる。

アンソニー・リードは、『大航海時代の東南アジア1450-1680年 I』の著作の序文において、歴史のもっとも活動的な部分である「リトル・ピープル」と言われて十把ひとからげにされてきた人びとのさまざまな状況を解明することでは、慣習的な歴史学者よりはるかに、近代の地理学者たち、文化人類学者たち、人口統計学者たち、そして環境科学者たちは、多くの成功をおさめてきたと述べている²⁾。これを、筆者なりに解釈すれば、東南アジアの歴史的研究において、支配階級よりも一般大衆の生活様式の方により多くの関心をもち、自然環境や地域性と人間との相互作用を重視してきた地理学的研究を、リードが評価したものと言えよう。

東南アジアの都市形成において、港市の成立は重要な特色である³⁾。15世紀から始まった「交易の時代」、それに続く大航海時代で、西のインドと東の中国、日本を結ぶ、東南アジアの交易ルートとしての重要性は飛躍的に高まった。この交易ルートに沿って、東南アジア各地に港市が発達し、交易ネットワークを形成するようになった。多くの港市は、河川の河口や河川沿いに形成された。港市には、中流や上流から森林の産物が船で運ばれてきた。また港市は、ヒンドゥー文化、イスラム文化、中国文化などの外来文化を受け入れる窓口でもあった。

港市は、政治・経済的内容によって、いくつかのタイプに分けられる。その一つは、「港市国家」である。政治形態からみると、港市自身が権力の中心であり、独立した港市である(例えば、1511年にポルトガルの植民地になる以前のマラッカ)。次に、中継交易のセンターであると同時に、後背地からの産物の積出港、そして広大な領域支

配の中心であった港市である(例えば、アユタヤ王朝期〔1351-1767年〕のアユタヤ)。

筆者は、かつてマラッカの華人社会の形成と現状について調査したことがある。形成といっても、ポルトガルの植民地になって以降を考察の対象とした。港市マラッカは、マラッカ川の河口に発達した。ポルトガル統治時代の1613年マラッカの地図には、マラッカ川河口の右岸に、華人集落、インド人集落、ジャワ人集落などが描かれている⁹⁾。15世紀前半の東南アジアの状況を記録した『瀛涯勝覽』によれば、当時のマラッカは「田はやせて収穫は少なく農耕する人もわずかで」、「王様は川に木橋を造り、その上に二十余間の橋小屋を造って、そこでいろいろな物の売買をしていた」という⁹⁾。

1405-33年にかけて、明の武将であった鄭和(雲南出身のイスラム教徒)は、計7回、東南アジア、インドからアフリカ東岸まで艦隊を組んで訪れ、中国への朝貢による貿易を促した。この「鄭和の南海遠征」の際に、マラッカは、パレンバンなどの東南アジアの港市とともに、鄭和の艦隊の重要な補給基地となった。ちなみに、東南アジアの華人社会では、鄭和のことを一般に「三宝太監」「三宝公」と呼び、鄭和をまつる「三宝廟」が建立されている。マラッカや中部ジャワのスマラン⁶⁾には、鄭和の艦隊に水を供給したとされる「三宝井」が観光名所となっている。艦隊や貿易船の補給基地として、マラッカなどの港市が、どのような都市構造になっていたのか、そこでどのような生活が展開されていたのか、などの点をより具体的に明らかにしていくことが必要であろう。

ベルナルド・グロリエの水力都市論に関して、筆者は『西欧が見たアンコール』⁷⁾に書かれた内容以外に十分な知識をもっていない。しかし、グロリエの言うように、アンコール遺跡の巨大な貯水池バライや幅の広い環濠が灌漑稲作のための水利施設であったという説には、にわかには納得しがたい。現在のカンボジアの稲作のほとんどが雨季の天水稲作であることを考えれば、雨季の稲作でかなりの米生産が得られるのに、乾季の灌漑のために膨大な費用と多大の労働力を投入してまで、大規模な水利土木工事を実施する必要があったのであろうか。稲作の水利に関して専門的に研究している日本の農業地理学者は少なくないが、彼らがそれらの地域の現地調査をすれば、「水力(水利)都市」論に対して貴重な意見を提示することがで

きるのではないだろうか。

III. 東南アジアの都市・村落研究に対する歴史地理学の課題

——むすびに代えて——

野間報告はたいへん壮大な研究であり、筆者の浅薄な知識では十分なコメントはできない。そこで最後に、やや一般論的な内容になって恐縮だが、東南アジアの都市・村落の歴史研究における歴史地理学の課題について、筆者なりの考えを述べて本稿のむすびとしたい。

かつて筆者は、第二次世界大戦後の日本における東南アジアの地理学的研究の成果を展望したことがある⁸⁾。この論文では、日本人の地理学研究者による東南アジア研究の成果を多数とりあげたが、それらの中には、残念ながら歴史地理学的研究の成果はきわめて少なく、別技篤彦の『東南アジア諸島の居住と開発史』⁹⁾や『東南アジア地域研究史序説——ラッフルズの業績を中心に——』¹⁰⁾などをあげたにすぎなかった。

東南アジアの都市・村落の歴史的研究において、碑文や古代の史料の解説・分析に優れた歴史学研究者に、地理学研究者が挑戦するのはなかなか容易ではない。しかし、前述のリードの言葉にあるように、地理学研究者の潜在能力が十分に発揮できる部分も決して少なくないのではなかろうか。

例えば、集落(都市・村落)の立地・形態・構造に関しては、地理学研究者は他の分野の研究者よりも、これらの点に関して強い関心を払ってきたように思う。また、自然環境と人間生活との相互関係という面でも、複合領域に位置づけられる地理学研究者は、他の人文・社会系の研究者よりも、自然環境への関心が高いだけに、より大きな貢献ができるのではないだろうか。さらに、地理学研究者は、研究対象地域そのものだけでなく、その周辺の地域や他の地域との関係・影響についても、常に注意しながら研究を進める習性をもっている。野間報告の「背域」概念も、このような習性から生まれたものといえよう。

最後に、他の学問分野の研究者と共同研究を行う際に、筆者がいつも感じることは、地理学にとって、地図は最も重要な「武器」の一つになるということである。できるだけ正確な地図化によって、空間的パターンが明らかになり、人間の生活の舞台を復元することができる。他分野の研究者

の多くは、地理学研究者によって描かれたさまざまな地図が公表されることを期待しているように思える。

(東洋大学・国際地域学部)

〔注〕

- 1) ①山下清海『東南アジアのチャイナタウン』, 古今書院, 1987。②山下清海『シンガポールの華人社会』, 大明堂, 1988。
- 2) アンソニー・リード著, 平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア1450-1680年 I —貿易風の下で—』, 法政大学出版局, 1997, p. xiv。
- 3) 大木 昌『港市』(京都大学東南アジア研究センター編『事典東南アジア—風土・生態・環境』, 弘文堂, 1997), 270~271頁。
- 4) 山下著書, 前掲1) ①82~87頁。
- 5) 小川 博編『中国人の南方見聞録 瀛涯勝覧』, 吉川弘文館, 1998, 62~71頁。
- 6) 山下著書, 前掲1) ①128頁。
- 7) ベルナル・P・グロリエ著, 石澤良昭・中島節子訳『西欧が見たアンコール—水利都市アンコールの繁栄と没落—』, 連合出版, 1997, 328頁。
- 8) 山下清海『第二次世界大戦後, 日本における東南アジアの地理学的研究—その成果と課題—』, 経済地理学年報38, 1992, 37~50頁。
- 9) 別技篤彦『東南アジア諸島の居住と開発史』, 古今書院, 1960。
- 10) 別技篤彦『東南アジア地域研究史序説—ラッフルズの業績を中心に—』, 大明堂, 1977。